

答の中に浮かんでくるものの誠実な邂逅が、その紀行文の深さを決定する。この「シエトランド」にはそういう香りを感じられた。推薦作。

この号の中に、「懐かしい日々と平岡先生」（臼田紘）とあったので、読んでみるとやはり平岡篤頼先生のことだった。私も早稲田の文芸科でお世話になったので、懐かしかった。

●「飛行船」（徳島県）27号

「飛行船」は活気づき、全体に勢いが増している。二一四ページのボリュームにもそれが表れ、内容も充実している。巻頭の「かすがい」も、主宰者の竹内菊世氏の旺盛なエネルギーを象徴して牽引力がある。内容は、詩の同人誌の世界での強力なリーダーシップを持つ男性の内幕を描きながら、不思議な魅力で、読ませていく。ある面では雑誌の成立する宿命的な側面であり、人の集まりであるものの、その背後に隠れた生臭い傷を伴いつつ、奇妙な人間同士の寄りかかりを表出し、描き切っているところに爽快感がある。けっして陰湿にならず、宿命やしがらみを明るく描ききるところに筆者の良質な個性がある。文章に弾力があり、竹内氏健在を感じた。推薦作。

また松田一美氏の歌人・塚本邦雄の足跡を追った「詩魂凜々」も、気合の入った力作で、傾倒した師への強い哀惜に裏打ちされて、他では見られない入魂の追悼になっている。

ムを作っていて快い。タイトルもセンスが感じられる。

巻末に「募集小説優秀作」とあり、若手の作品が二作掲載されている。これは編集後記によれば、「『小説募集中』と大書したチラシとポスターを作り、県内文化施設に置いてもらったところ五篇の小説が寄せられた」という。その中の優秀作二篇を掲載したとのこと。うち一人は二十代とという。「やってみるものだねー」の一言が、現在の「飛行船」を象徴している。

●「木木」（佐賀県）33号

この号は、「追悼／藤崎伸太先生」が組まれていて、いくつかの偲ぶ文章が並んでいる。こういう追悼がなされるのが、誌の結合力や労りを感じさせる。隠れた魅力でもあるだろう。読むと藤崎伸太氏は、海軍兵学校の卒業生。最後の生徒であったように想われる。その厳しい訓練に培われた強靱な肉体と精神が、医師への道と重なって、最後に「人生、いろいろあらあーね」と結語されているところに、奥の深いおもしろさを感じる。それは文学の源に繋がっている。

この号には前のまほろば賞で注目された木山葉子氏新作「水水母」が載っている。別な題材をどのように扱い、どのような文章力を発揮するのか、楽しみに読ませてもらった。期待に違わず、その文章を紡ぐ力には堪能させられた。粗筋は結婚直後に夫の膨大な手紙を見つけ、その相手



る。塚本邦雄の歌への熱情やその精神世界もよく穿たれ、また自身の青春時代の苦闘にも立脚していて、師の歌との共鳴がより深く響き合っている。これは歌人に身近に接した経験と、深い傾倒に基づいた哀悼がなければできなかった哀惜の作品だろう。また、このようにキリスト教や聖書との深い交わりを負った短歌であることは初めて知り、宗教の底にある苦悩の影を伴ったものであることが深く認識された。宗教短歌をも可能にする奥の激しさが浮かび上がって、塚本邦雄という歌人の彫りを深めている。後半、やや単調になり、起伏が乏しくなって疲弊感が出てくるのは、書く時間に迫られて、推敲が足りなかった印象がある。推薦作。

「桜雨」（渋谷政子）は歯切れのいい短い文が一つのリズムが一つ年下の異性からであることに、夫婦の間の溝のようなものを覚え、その違和感にずっと苦しめられるという流れである。夫はその手紙を処理せずいつまでも残しておく。しかもその手紙の奇妙な点は、愛情の告白というよりも、ただ出来事を淡々と報告するその記述性にある。夫は高校の同級生などの付き合いを今でも大事にし、現実には付き合いが続いている。しかし、その人間の輪からは主人公は拒まれ、疎外感を抱き続ける。その奇妙な違和感が水母に象徴されて、最後に水母の群れの干上がった死骸への情景に結びつく。これによってもう一度夫との関係がやり直せそうな気持ちを抱くという結末である。優れた文章力は「大きく湾曲した入り江が、村を囲うように潮を湛え、波

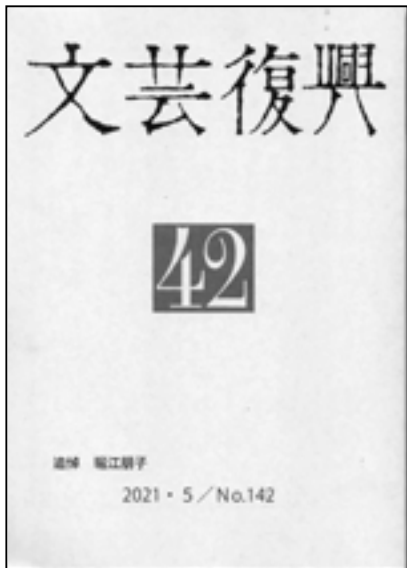


敏が輝いている」とか、「死んだ魚の目のような、どんよりとした絵里子の目が、彼の手の動きを空に見ている」などにもよく表れている。蚕が白糸を吐き出すような美しい紡ぎを再確認する。

ただ、今回の作品には、不思議に思われる点が幾つかあり、読み終わってそれが払拭できないもどかしさも残る。手紙によって違和感を覚えながら、夫婦の生活はなぜ続いていくのか、夫が高校の仲間をどうしてそこまで大事にするのか、その秘密の部分は明らかにされない。高校の仲間にごだわり続けるのは、逆に言うところ社会的に成長しない男ではないのかと夫の輪郭が歪む点に、小説としての立脚性が薄弱になっている。またこう言う夫婦のあり方で何十年も保てるものなのか、リアリテイに欠ける気もする。また、「水母」が何の象徴であるのか、気分的にはわかったような気もするが、もう一つ判然とせず、どう夫との関係に繋がり、過去とどう結びつくのか曖昧なままの感じがする。それを「味」であり、はっきり言わないところがいいのだともいってしまうが、小説作品の結晶度とすれば、もう一つ説得して焦点を結んでほしいとも思う。違和感があくまで高校時代の過去に根差し、現実の夫婦間の具体的な問題には波及しないことが、リアリテイを遠くしていることに繋がっているのかもしれない。またタイトルも「水」が重複しているので、なぜ「水母」だけではいけないのか、

していたが、丸山修身氏が引き受けられたようで安心した。存続を喜びたい。

後半に森下征二氏が鎌倉時代に材を採った『渡と袈裟』に衣川』を載せているので、興味深く読んだ。源頼朝に拳兵を決意させた僧、文覚の発心の契機となった話を展開していて、実におもしろく、様々な角度から推理していく手際は、鮮やかである。もともと男女のことにベースがあるもので、それだけでも引き込まれる。美しい人妻に横恋慕する武士が衣川という自身の叔母を脅迫して、娘であるその人妻を呼ばせて一夜を共にする。人妻は不義理をした罪悪感で、夫を殺す奸計に紛れて自らを武士に討たせる。妻自身が死を選ぶこの貞操美談が「源平盛衰記」にある元



疑問が残る。いずれにしても、優秀作にはちがいない。林絹子氏の「盗癖のある女」は、タイトルからして興味深の上に、二百枚を超える力作である。カラオケコミュニティの内部の男女の陰湿な内幕を暴くように読ませ、実態のリアリテイに傾かせられる。現代では、一定の主婦層の普遍的な実態に迫っているとも言えるが、救いが見つからない閉塞感も伴う。「盗癖」が月謝袋からお金を抜き取る男女の仲の代償としてすり替わるところに、「盗む」罪悪感が薄らいでしまつて、男女の腐蝕感になり変わってしまった恨みがある。林氏は本来もつときれいな文章だったように思う。準優秀作ではあるが、林氏が本来書くべきものは他の領域にありそうな気もする。

●「文芸復興」(東京都) 42号

この号は「追悼／堀江朋子」の特集が巻頭になっていて、哀悼が全面に押し出されている。ちょうど一年前に「文芸復興」の同人誌紹介を書いていたので、まさかこのように早くに逝かれるとは、夢にも思わなかった。追悼号には死因が明らかにされていないので、どのように逝かれたのか空白感が残るが、「三井財閥とその時代」のような大きな史録は今後現れないだろう。これだけでも大きな業績である。氏の筆跡は、壮大なロマンに彩られているように思う。冥福を祈りたい。「文芸復興」の今後がどうなるのか心配

の話である。しかし筆者は中国の昔から伝わる話と比較して、その不自然さを指摘し、様々な角度から真相に迫っていく。元の中国の話は、戦地に長く出た留守の間に女房が他の男とできてしまい、邪魔になった先夫を殺すというものである。これを下敷きにして、貞操の妻ではなく、女性の淫蕩性を前面に持ち出して、三角関係を通して洗い直す。確かにこちらの方がありそうな話である。戦いに赴く夫の留守に他の男とでき、さらにそれが女性の性の欲求と重なった場合のもつれの方が、死を選ぶ貞操美化よりもリアリテイがある。筆者は「袈裟」というこの人妻の中に女性の淫蕩性を露出させ、それから来る三角関係の泥沼を暴く。それは筆者の推論の鋭さを示すものではあるが、ここまで近代リアリズムに基づいて想像を膨らませるのであれば、伯母の淫蕩性をも巻き込んで、文覚の前身である武士は、二人に関係していたという推論も成り立つかもしれない。一方、確かに寝取られた夫の側の態度も不自然である。普通は妻を寝取られたら、報復しようとするのが男である以上、その姿勢を最初から放棄して悟りきっているのもおかしい。とすれば、妻のこの淫蕩性に最初から愛想を尽かしていたようにも取れる。文覚の出家の動機は、この性の泥沼から抜け出すためにその根源である女の首を切つたとするほうが、自然かもしれない。「源平盛衰記」の美談は、文覚の出家そのものを美化するための脚色が施され

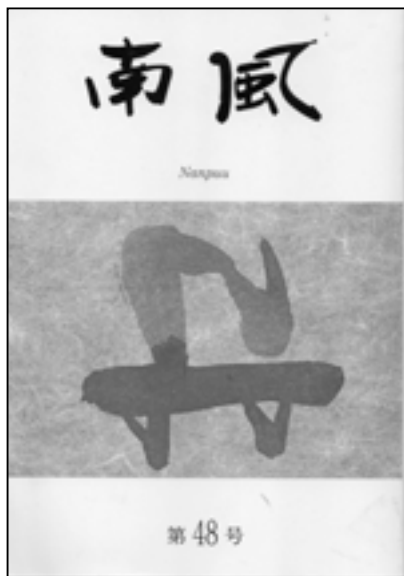
ているようにも受け取れる。準優秀作。
 「闇夜」(櫻井幸男)も好短篇で、破綻した銀行の事後、様々な怨恨の交錯する中で、人生を振り返る彫りの深い陰が味よく揺曳している。これも準優秀作としたい。他にも力のある書き手が揃っている。

●「南風」(福岡県) 48号

この誌の書き手はみな技量が高く、誌全体のレベルを高いものにしていく。

「骨が哭く」は、まほろば賞受賞者の和田信子氏にしては大胆なタイトルだが、これくらいの言葉遣いを遣わないと、埋もれてしまう危惧はある。骨の痛みの経歴を遡りつつ、夫との過去の思い出や別離を並べて、晩年の病院生活まで描く骨を軸にした変遷は、飽きさせずに、快い流れを作っている。これは筆者の現実を冷静に見る態度と運命やなりゆきを素直に受け入れる受容の豊かさに裏打ちされて、流れが自然な変遷の色合いを帯びているためだろう。高揚や驚きがむしろ抑制され、慎ましい受容の織物の綾に変えられていく。和田氏の文章の魅力は、その綾織にあるのであって、けっして起伏の激しさやドラマチックな盛り上がりがあるのではない。緻密な隠し織に込められたきめ細かな感情の秘匿にこそ魅力がある。すでにまほろば賞受賞者であることで、控えてもらって推薦作。

「鴉」(紺野夏子)は、失踪した父親を最晩年に訪ねて、



その別離の人生を問い返す小説である。すでに末期癌で入院した父親はその住まいに住んでいず、鴉が近所を飛び交っている。大家さんにいろいろ話を聞いて父の暮らし振りが蘇ってくるにつれ、その鴉と親しくしていた父親の姿が浮かび上がってくる。鴉と仲良くしていた父のその姿の中に、孤独な人生の道が遙かに繋がり、その愛惜がこみ上がってくる結末になっている。鴉がうまく生きていて、鴉の孤独までが匂ってくる。ありふれたタイトルなのが少し気になるが、一つの人生の姿はよく象徴されている。父親の人生を追いながら、同時に自分の人生の末路に繋がっているような気配がある奥行きがいい。優秀作としたい。

巻頭の「どうもしない」(田中吉)は「次郎」と「とう

子」のモノログによるデュエットだが、斬新に見える手法が成功していない。手法の必然性が希薄で、事件の深刻さが逆にそれで流れてしまっている。

「あぐりさんちの丑三つ刻」(宮脇永子)は、軽妙で出だしにも才を感じるが、軽妙さが滑って「三笠山」の短歌が出てきたり、親鸞上人の歌を引いたりするのは、破調をきかしている。軽妙さはあくまで武器に使うことを徹底しないと、テーマそのものが浮薄に流れることを警戒すべきだろう。

●「アピ」(茨城県) 11号

「文学を愛する会」による小説・詩・短歌・俳句・川柳・ルポルタージュの同人誌だが、三島由紀夫の死を主流にした小説「輝きの夏」(宇高光夫)は、市ヶ谷の自衛隊本部



で決起した三島をルポ風の叙述を交えて活写した筆致には迫力と生々しさがある。そのときの衝撃の生々しさがよく伝わってくる。
 また「日本百名山から国内三千メートル峰登頂までの軌跡」を記した「神々の座への憧憬」(宇田三男)は登山記録を細かく記した実に貴重なもので、読むべき、また残すべき価値を感じた。貴重な記録であり、同人誌だけでなく、広く一般にとっても意義のあるものだろう。インターネッ トなどに長期保存しておくのがベストな気がする。

今季をまとめる。

優秀作 「水水母」 木山葉子「木木」33号

「鴉」 紺野夏子「南風」48号

推薦作 「かすがい」 竹内菊世「飛行船」27号

「詩魂凛々」 松田一美「飛行船」27号

「シエトランド」 加賀岳彦「飛火」59号

「骨が哭く」 和田信子「南風」48号

準優秀作

「渡と袈裟」に衣川

森下征二「文芸復興」42号

櫻井幸男「文芸復興」42号

「盗癖のある女」林 絹子「木木」33号